

学生団体による国際教育協力の可能性 —ラオス教育支援団体の活動に着目して—

乾 美紀
(兵庫県立大学)
梯 穂乃香
(元兵庫県立大学)

1. はじめに

(1) 研究の背景

現在のラオスの教育は、就学前教育、初等教育、中等教育（前期中等教育・後期中等教育）、そして大学や専門学校などを含む高等教育に分かれている。教育行政を統括し、教育事業の中心となっているのは教育省スポーツ省で、地方には県教育局、郡教育事務所が置かれている。

ラオス政府は1990年の「万人のための教育会議」に参加して以来、特に初等教育の拡大に重点を置いてきた。その結果、2000年度の初等教育の純就学率は81%であったが、2009年は91.6%、2012年度は95.2%、2014年度には98.0%を達成しており、就学環境は向上している（MOES 2012, Lao EduInfo 2014）。

残り2.0%を達成できないことには次の理由が挙げられるだろう。第一に、いまだ不完全学校（全学年を持たない学校）があることである。そもそも学校がないと就学することができない。特に地方の不完全学校の問題は深刻で、首都ビエンチャンから離れるほど不完全学校が多く、たとえばビエンチャンでは、小学校の完全校は92.4%であるのに対して、本稿で取り上げる北部ルアンパバン県においては82.4%、中国と国境を接するボンサリー県では64.3%と、国内でも大きな格差がある（Lao EduInfo 2014）。

第二に、特に山岳地帯に見られる家庭や学校の事情が関係している。たとえば、子どもが就学しない理由として、「病気、空腹、学校がない、授業が分からない、先生がいない」（沢田 2013）が挙げられる。つまり、たとえ学校があっても、児童や家庭の問題、教師の不在や能力不足などが不就学、留年など、学校から疎遠になる状態につながっている。

以上の中で、地方の不完全学校の問題は、子どもの就学に大きな影響を与えている。地方行政は2000年に始まった地方分権化政策のもとで進んでいるが、トップダウンのシステムに慣れたラオスでは機能に時間を要している。不完全学校については多くの



図1. ラオス地図

国際支援がなされているものの、まずは村が解決せねばならない。ラオスでは小学校の建設は、村が費用を負担することになっているからである。原則として郡教育事務所からの経済支援は受けることができないが、生活に余裕がなく予算が不足している村では、村以外の力を借りることができる。たとえば、村人とのつながりを持つ会社や県の教育局に支援経験があるNPOなどからの支援である。このような状況において、教育支援を行うNPOや学生団体の活動が活発に行われている。なお、学校建設に関わる調整は、教育レベルに関係なく県教育局が担当しており、小学校建設についても県教育局がNPOとの連絡、交渉などを行っている。

(2) 本稿の目的と方法

本稿の目的は二つある。第一に、筆者らが国際教育支援活動の一貫として、ラオスの学校建設に取り組んできた経緯を振り返り、学校建設や継続支援プロセスを明らかにすることである。第二に、同様の教育支援を行う学生団体と社会人団体を比較し、「学生団体だからこそできること」を導き出し、学校建設に学生団体に関わる意義を明らかにする。このことにより、今後の学生団体の継続的な支援活動のありかたにつなげていくことができる。

筆者(梯)は、兵庫県立大学に在籍時、ラオスの教育支援に取り組む学生団体CHISE(チーズ: Children Hope Immortal Smile Education)で2013年2月から約1年間副代表を務めた経緯がある。また筆者(乾)は、ラオスの教育を専門分野とすることから、2013年よりCHISEのスタディツアーに同行したり、講演活動を共同で行うなど活動を共にしている。本稿では、筆者らが2011年11月から現在まで行ってきたCHISEの実践活動や他の学生団体、社会人団体へのインタビュー調査をもとに考察を深めていく。

2. 学生団体 CHISE の活動と実践

(1) 学生団体 CHISE の活動地

CHISEは2009年に設立された団体で、神戸・三宮を中心に関西の大学生各代15人前後で、「ラオスの子どもたちに笑顔を咲かせること」をコンセプトに活動を行っている。現在まで、山岳地帯の2つの村に学校を建設してきた。

現在のCHISEの活動地はラオスのルアンパバン県である(図1参照)。そのパクウー郡に位置するホエイカン村、そしてその近くにあるホエイペン村(両村とも中心部から北に車で約2時間)に小学校を建設した。パクウー郡ではほとんどの村に小学校はあるが、村の予算不足のために建物が古く作りが粗末なことが特徴である。不完全校がまだあること、少数民族が多く留年を繰り返す子どもがいることから、初等教育の残存率は低く、首都ビエンチャンでは93%であるのに対して、パクウー郡では79.6%である(Lao Edu Info, 2014)。パクウー郡全体を通しておもな産業はほとんどない。

まず、ホエイカン村は人口約500人で、ほとんどが少数民族カムーである。この村の校舎譲渡式に参加した大隅の報告(2011)にあるように、田畑はほとんどなく、住民は山林労働と家畜農業に携わっている。CHISEはホエイカン村に学生団体夢追人と共同(支援額75万円ずつ計150万円)で小学校1校目を建設し、以降継続支援を行っている。ホエイカン村はもともと学校がなく、近くの村まで通わなければならなかった。そのため、村で初めての学校が完成されたことになる。継続支援として具体的には、電気を通したり、衛生教育や運動会、模擬授業を行うなど、ハード・ソフトの両面でさまざまな活動を行っている。

次に、ホエイカン村から車で10分ほどのルアンパバン県パクウー郡に位置するホエイペン村は、人口約700人で、少数民族ヌー

とカムーが混在している村である。ホエイカン村と同様に主な産業はなく、わずかながら米や野菜を作る農業を行っている。ホエイペン村には、校舎2棟の学校があったが、そのうち1棟は木造で校舎の壁には穴が開くなど劣悪な環境であるため、新しい校舎が必要とされていた(写真1)。そこで、CHISEは村と話し合い、支援額90万円をかけて校舎を建設することとした。

(2) 活動の一連の流れ—事前調査

1) 学校建設前の活動

学校建設地は、ラオスの教育局からNPO法人DEFECを仲介して提示される。その報告を受けたCHISEは実際にラオスを訪れるスタディーツアーの際に複数の候補地を視察し、その際、村人や学校の先生にインタビュー調査を行う(写真2)。村の生活状況をはじめ、現在の子どもたちの教育環境などさまざまな側面からの質問を投げかけ、その答えから、同時に村人たちの教育に関する熱意についても感じ取っていく。それは、学校建設後の学校運営がうまくいくかに関わってくるためである。学校は村で管理するため、村人の熱意があれば、教育環境が向上していく可能性が高いことをこれまでの経験から学んでいる。

実際に2校目建設地を決める際に2つの村(キエット村とホエイペン村)を訪れ、インタビューしたが、ホエイペン村では、

村人は穴のあいた学校の設備を改善したいにも関わらず、村の予算不足のため実行できないこと、その必要性を行政に掛け合うがなかなか対策がとられていないことが分かった。一方でキエット村では、教育環境を整えることよりも、水道や道路など村のインフラストラクチャーの整備の方が優先順位が高かった。以上のように村、教育局、CHISEとの対話で、村に教育に対する熱意があるかどうかを重視し、学校建設の候補地を決めていく。

2) 支援金集め

学校建設地が決まると、支援金集めが始まる。支援金集めのために、普段は週に1回程度集まって街頭募金を行う。さらに、大学の学祭やイベントに出店したり、CHISE主催のイベントを開催し、その利益を支援金にあてたり、講演会に出て支援金寄付の協力を呼びかけるなどの活動を行ってきた。実際にラオスに候補地の視察に行っているため、支援先の現状を実際の写真を見せながら自分たちの言葉で伝えることができる。そうすることで、説得力が増し、協力者にも理解してもらいやすくなる。

基本的な学校建設の流れとしては、CHISEが支援金を集め、NPO法人DEFECを通してラオスの県教育局に送金し、建設工事の作業は支援先の村人が行う。建設工事を行う労力は村人負担であり、村以外から技術者を



写真1. 旧校舎(ホエイペン村)



写真2. インタビュー調査(ホエイペン村)

呼んで指導役に抜擢する。学校建設の途中経過は県教育局が視察し、その結果は写真付きで DEFC を通じて CHISE へと伝わる。

学生団体の活動の特徴は、支援金を集めながら、春・夏休みの年2回ラオスの支援先を訪れるスタディーツアーを行うことである。村での滞在期間は各2、3日と短い、村人や子どもたちと親しくなれるようにさまざまなプログラムを用意する。そこで村人や子どもと信頼関係を築き、村のニーズを再び確認したうえで、帰国後に資金集めを再開する。

3) 建設後の継続支援

学校が完成すると、開校式を行う。その際、村はパーシーという祝賀儀式で団体メンバーを歓迎してくれる。パーシーとは、出産、新年、結婚などの際に行われるお祝いで、村によって形式はさまざまであるが、村人手作りの食事なども用意され、村人や子どもたちと団体メンバーが一緒になって学校の完成を祝福する。開校式を行うことで、学校が村に譲渡され、村での学校運営が開始される。

CHISE は学校建設後も支援先を訪問している。1校目のホエイカン村では、村や学校の状況を視察・調査、電気を通すハード面での支援、教育の充実に向けたソフト面での支援を行っている。訪問時の活動内容はその時と場合に応じてさまざまであるの

で、現在まで合わせて計5回ラオスを訪問した時の活動内容を表1に整理した。

支援先の村では異文化交流として書道や折り紙をすることが多い。しかし CHISE 独自の活動内容もあり、たとえば村のいたるところに自然に還らない菓子ごみがたくさん落ちていた状況を改善する目的で、ゴミに関する教育を紙芝居で行ったこともある。また、教えるばかりではなく、子どもたちに川遊びを教えてもらうなどお互いの文化を学べるような双方向的な活動を行っている。

4) 地域や支援者とのつながり

近年 CHISE は、日本の地域の学校の連携活動も積極的に行っている。まず滋賀県守山市立守山南中学校では、生徒会が中心となって全校生徒に呼びかけ、文房具を集める活動を行っている。また、継続支援として CHISE が訪れた時に行う授業の教材作り（英語教材）を CHISE と共働で行っている。大学生だけでは思い浮かばない中学生のバラエティーに富んだ発想がくみ込まれている。さらに神戸市立青陽東養護学校の生徒が手作りしたノートを CHISE が預かってラオスに届けたり、大阪市立成南中学校、墨江丘中学校から提供を受けた文具や千羽鶴も現地に届けるなどして積極的に地域ともつながっている。

以上のような活動の情報発信として、ホームページの開設や Facebook、twitter、ア



写真3. 1校目のホエイカン小学校



写真4. 2校目のホエイペン小学校

表 1. ラオス支援先訪問時の活動内容 (2015 年 1 月現在)

ラオスへの訪問	訪問日	訪問先	活動内容
1 回目	2012 年 8 月 22, 23 日	ホエイカン村	書道、外遊び、折り紙、文房具寄付など
2 回目	2013 年 2 月 27 日	ホエイカン村	川遊び、折り紙、ノート寄付など
	〃	キエット村	学校視察。文房具・ノートの寄付など
3 回目	2013 年 8 月 22 日	ホエイカン村	世界地図づくり、ゴミ捨ての紙芝居など
	2013 年 8 月 23 日	キエット村	2 校目候補地のインタビュー (村長、村人)、学校視察。お絵かき、音楽など
	2013 年 8 月 24 日	ホエイペン村	2 校目候補地としてのインタビュー (村長、校長など)、学校・村の視察など
4 回目	2014 年 2 月 27 日	ホエイペン村	カレンダー作り、1 年後の自分への手紙
	2014 年 2 月 28 日	ホエイカン村	祝賀儀式、校舎工事手伝い、折り紙など
5 回目	2014 年 8 月 9・10 日	ホエイペン村	英語学習、理科実験

(以降も継続的に年 2 回訪問)

メーバブログなどの SNS を含めた多様な手段をとっている。また、SNS という気軽にアクセスできる環境において随時会計報告を行うことで、協力者の信頼を得ることもできる。

3. インタビュー調査の概要

次に本稿の目的を追究するため、他の学生団体へのインタビュー調査を行うことで、「学生団体ならではの活動」を導き出し、「学生団体だからこそできること」を明らかにする。

具体的には、CHISE と同様の活動を行う学生団体夢追人、Infinite Connection、SIVIO (Student International Volunteer Individual Organization) の代表者にインタビュー調査を行い、学生団体ならではの活動の特徴を導き出す方法を試みた。

さらに、社会人団体である NPO 法人

DEFC (Demining but Education For the Children)、NPO 法人 ISSC (International Support Association of School Construction) の代表者にもインタビュー調査を行うことで、学生団体と社会人団体を比較し、それぞれの特徴を明らかにする。DEFC と ISSC は、学生団体とラオスの教育スポーツ省や県教育局をつなぐ橋渡しを行う重要なパイプ役でもあるため、学生団体の活動についても詳しく、社会人団体と学生団体の両方の立場で教育支援について見解を得ることが期待できる。

主な質問事項は、①団体概要や具体的な活動実態、②ラオスの支援先を実際に訪れたときの活動内容、③活動を通じて感じる学生団体だからこそできると感じること、④社会人団体と学生団体の違いなどで、半構造化インタビューを実施した。

4. 各団体の活動内容に関する回答

(1) 学生団体の活動内容

1) 夢追人

2009年に団体設立以降、現在(2015年1月)までに北部ポンサリー県やルアンパバン県に小学校4校建設(うち1校はCHISEと共同建設)、以降継続支援を行っている。さらに既存の中等学校に水道・トイレの支援を行う活動も展開している。

支部は関西、東海、関東にあり、夢追人は「宇宙一敷居の低い国際協力」をコンセプトに活動している。支援金の集め方は「100円の輪」という方法で、街行く人に活動の趣旨を説明したうえで100円募金の協力を求めることである。そして100円協力を得た人には名前を聞き、後に学校が完成すると、協力者の名前を模造紙やファイルに書いて贈呈し、協力者全員の名前を残すようになっていく。協力者の思いを支援先に残すための目に見えるアイデアであるといえる。

2) Infinite Connection

2012年に団体設立以降、現在までにチャンパサック県ポントン郡ノンテノイ村に、幼稚園、小学校、中学校を建設した。ひとつの村に幼稚園から中学校までの教育施設を続けて建設することは他の学生団体にはみられず、当団体の特徴ともいえる。活動は関西中心で、これまでの活動人数は約70人である。Infinite Connectionは支援金集めのために、街頭募金、チャリティーイベント、フットサル大会などを行っている。メンバーはほぼ大学生であるが、チャリティーイベントの規模は大きく集客は数百人規模であり、その「人を巻き込む力」が非常に強い団体である。

「教育の充実から国の充実へ」「日本における慈善活動の意識と認知の改革」を目標に活動しており、教育環境を整えることか

ら始め、大きな目標としてはその地域の経済発展、そして最終的にはラオス自体の経済発展を目標としている。また、学校1校建設達成までのスパンが短く、活動開始から約1年で1校を建設しており、勢いのある団体である。

3) SIVIO

SIVIOは2007年団体設立以降、これまでルアンパバン県を中心に小学校5校を建設しており、学生団体としては実績がある団体である。学校完成後は継続支援を行っており、具体的には、村に電気を通したり、教材が不足している現状から、教科書支援を行うことを計画している。

SIVIOは関西、関東、東海に支部があり、メンバーは100人以上で規模が大きい団体である。人数は多いが、団体には部署を設けているため、大人数でも組織として機能する体制が整っている。その特性を生かし、大規模なチャリティーイベントを開催し、利益を支援金にあてている。一回のチャリティーイベントで10万円単位もの利益を生み出すなど、非常にダイナミックな活動をしている。他にも、街頭募金、学祭・イベントブースへの出店、フリーマーケットなどを行っている。

(2) 社会人団体の活動内容

1) NPO法人 DEFC

DEFCは2006年にNPO法人化され、「爆弾ではなく学校を、地雷ではなく教科書を」を標語として教育支援を行っており、2010年ラオス政府より政府認証のNGOとして認可された経緯を持つ。代表を務める沢田氏は元JICA長期専門家で、現在ラオスにも事務局がある。DEFCの主な活動は、奨学金、残留不発弾啓発、校舎建設、図書支援などである。また、学生団体とラオスの教育局をつなぐ重要なパイプ役にもなっており、支援団体をサポートする役目も果たしてい

る。具体的には学生団体がラオスの支援先を訪れる際の連絡をラオス側に事前に報告すること、教育局との支援金のやりとりを確実にすること、教育支援に必要な情報を提供することなどが挙げられる。学生団体 CHISE、夢追人、SIVIO は DEFC と連携しているため、学生団体の活動については熟知している存在である。

当初、DEFC は学生団体がラオスの支援先を訪れる際に、学生に同行していたが、徐々に同行回数を減らし、現在はほぼ支援先に同行することはなくなっている。これは、学生団体がある程度経験を重ね、村の信頼も得て、学生団体に任せることが出来ようになってきたからだ。学生団体のみではできない、支援金の送金や学校建設の契約などは DEFC が間に入って確実に行うようになってきている。

2) NPO 法人 ISSC

NPO 法人 ISSC は、2003 年から活動を開始し 2011 年に NPO 法人化した。活動内容は、①社会教育の推進を図る活動、②人権の擁護又は平和の推進を図る活動、③国際協力の活動④子どもの健全育成を図る活動⑤災害救援活動、に分けられ、主な活動地域は日本・ネパール・ラオスである。貧しいアジアの国々で勉強したくても思うように学ぶことができない子どもたちのために、途上国の将来の発展の礎として、現地での学校建設を支援する活動を行っている。金銭的に支援するだけではなく、住民が「自立できる」援助、村との「共存・共栄」を心がけて学校建設に協力している。

また、ISSC は DEFC と同様、学校建設支援者のサポートを行っている。日本の若者の育成のため、国内の活動、団体維持、途上国での支援活動について教育実践し、大学卒業までに自信の持てる結果と価値観を得ることができるよう指導役も務める。国外活動では若者らしい支援の形を打ち出し、

学生が企画する運動会・遊具づくりなど実りある交流を目指しており、「支援をしてあげている」のではなく「多くの実りを得る」ことが若者にとっての国際支援であると代表の石原氏は話している。学生団体の中で ISSC と連携しているのは、Infinite Connection であり、学生団体とラオスの教育局のパイプ役となり、学生団体のサポートを行う面では DEFC と同様である。

5. 学生団体の意義に関する回答

インタビュー調査を行った結果、学生団体の特徴がいくつか明らかになった。その結果について、次に取り上げていく。

(1) 子どもとの距離の近さ

インタビューの調査対象とした学生団体は共通して、年に 2 回ほど（春と夏）支援先を訪れている。その時、どの団体も子どもたちと触れ合うことを欠かさないようにしている。

各団体とも、必要に応じて村や学校でインタビュー調査を行うことやソフト面での継続支援として、衛生教育、折り紙（夢追人）、絵本作り、うちわ作成（Infinite Connection）、運動会（CHISE、写真 5、6 参照）など、子どもと触れ合えるさまざまな企画を行っている。体を動かして遊ぶということはもちろん、異文化に触れ合える屋内授業を行う団体も多い。さらに、手洗いなどの衛生教育を行うことは、病気を防ぐための第一の手段として実施されている。ラオスでは日本の実技教科にあたる（体育・保健、家庭科など）がほとんど教えられていないため、算数や国語などの主要科目以外の授業を行うことも、重要な活動に位置づけることができる。Infinite Connection 初代代表によると、「子どもたちの抵抗はだんだんなくなる。年の近い学生が来ることで子どもたちは喜んでくれている」と話し

ている。このことについて、DEFC 沢田氏と ISSC 石原氏は次のように述べている。

学生は子どもと遊んですぐに仲良くなれる。社会人団体は体力もないため、適応できない。子どもたちとの溶け込みに差がある。社会人団体が支援先を訪れる時は、会食や儀式の規模も大きくなりやすく、子どもと触れあえる時間が少なくなる。村も学生のほうが気楽に付き合える。

(DEFC 沢田氏)

社会人団体はセレモニーや完成した校舎の確認などに時間がとられることが多く、子どもと一日中遊ぶような関わり方は難しい。運動会や子どもと遊ぶことは体力的に厳しい。学生団体は子どもたちと年齢が近いので仲良くなりやすいという利点がある。子どもたちも親が出稼ぎで居ないことも多く、甘えられる大人を求めている。

(ISSC 石原氏)

また、学生は子どもにとって一緒に遊べるきょうだいのような一面と、甘えられる親のような一面を兼ね揃えているのではないかと考えられる。加えて、社会人団体は歓迎の儀式などの規模が大きくなりやすく遊ぶ余裕もないことから、学生の方が子どもと遊べる時間が多いということもわかる。

(2) 有効な時間利用

「学生団体だからこそできると感じることはあるか」という問いに対する回答で3つの学生団体が共通していたことは「有効な時間利用ができる」ことである。どの学生団体も、普段の活動時間は週1日程度であるが、イベント前やスタディーツアー前などは必要に応じて集まる頻度は増える。現地での活動準備ための時間を普段の活動のなかで割くことができるのも、学生ならではの時間の使い方になるのではないだろうか。

社会人団体と学生団体の訪問時の違いとして、「大人のサポーターは建設支援を行っても何度も長期間村に入るのが難しいので、関わり方が単発になる」(石原氏)、「大人は開校式を終えると訪問しなくなり、定期的に現地に赴かない(沢田氏)が挙げられた。

学校建設後、定期的に支援先を訪れることができるのは時間に余裕がある学生団体の特徴であるということがわかる。学生団体は、学校建設後の継続支援を見越しての支援活動を行っている。世界で数多く教育支援を要する国は存在するにも関わらず、夢追人が支援国をラオスに決めた理由のひとつは、「ラオスは渡航の際の時間や費用も少ないため、何回でも行きやすい」ことが挙げられていた。学校建設後の継続支援も教育支援として求められていると活動当初から判断していたことがわかる。そのよう



写真5. 運動会の実施 (CHISE が実施)



写真6. 運動場で体操

に長い目で見て関わりをもつことは、学生団体ならではの特徴でもある。

このように、支援先との関わる時間を多くつくることも、学生団体の特徴といえる。学生団体は、ひとつの支援先とこの先どれだけ長く関わっていくかについて制限されることはないが、NPO 法人などの社会人団体は、限られた時間のなかで費用対効果の面でも考えて活動しなければならないため、活動にある程度制限を受けることが現実である。

(3) ニーズを反映した支援

前述したように、学生団体の利点として挙げられた時間の有効活用は、何度も現地に足を運ぶことにつながる。さらに、「学生団体が現地に赴くことは、支援先のニーズをくみ取り、それを支援活動に反映していくことを可能にする」(石原氏)。

学生団体が現地に何度も足を運ぶことで、その都度行う村人へのインタビュー調査や視察の結果から支援先のニーズを把握することができる。そして、学生団体は支援先のニーズを反映し、需要のある支援につなげていくことが可能になる。需要のある支援こそが村との信頼関係を築くための第一歩であるといえるのではないだろうか。現実には、CHISE がホエイカン村に学校を建てたことで、子ども達は隣村の学校まで通学する必要がなくなった。このことは、就学率や中途退学率の改善に効果をもたらす。他にも、村内に学校がない村、不完全学校しかない村は依然多いため、学生団体が村のニーズを反映した協力することにより、不完全学校が減っていくことにもつながっていく。

実際に、CHISE と調査対象である3つの学生団体すべてで、学校建設後、支援先の村人が活発になり、教育環境の改善やインフラストラクチャーの整備を自ら行うようになった例が挙げられている。例えば、壁

のなかった学校の教室に学年ごとに授業を受けられるように壁をつくったり、学校の近くに崖がある場合は周りに柵をつくるなど、目に見える変化が表れている。ホエイペンでは、旧校舎を取り壊し、そこに遊具をつくるなど、村人が教育環境の改善に向けて自主的に動き始めている。ラオスの中には、日本の大企業がCSR(企業の社会的責任)により、多数の学校建設プロジェクトが実施されているが、校舎建設後にも定期的に村に出かけ、継続支援を行うケースは少ない。村人と話し合いながら継続的に支援を続けることは、学生団体であるからこそ可能な活動だといえる。

村のニーズを支援活動に反映することは、村との信頼関係を築き、村の意欲を引き出し自立の道へ導くことにつながっているのではないだろうか。お互いに意見を出し合えるようになると、教育環境を改善していくために村と学生が協働することが可能となる。

(4) 新しい発想での挑戦

インタビュー時に夢追い人は「学生は若く感受性が豊かなので、さまざまなことを吸収しやすく、それがまた新しい発想につながる」、SIVIO は「学生ならではの発想で意思決定し挑戦することができる」と述べている。このように、学生ならではの新しい発想とその実行が、「学生団体だからこそできること」に繋がっているのではないだろうか。沢田氏は、この学生ならではの新しい発想が今まで学生団体の活動を見てきたなかで印象的だったと話し、特に夢追い人の「100 円の輪」の発想について、「社会人にはない、若さの特権を生かした行動」と評価している。

また SIVIO は「学生だからこそ学生に伝えることができる」と話している。実際、Infinite Connection や SIVIO が行っているチャリティーイベントの対象者は学生で

ある。周りの学生を巻き込みながら、国際協力として支援を行うことは、支援の理解を深めてもらうことにも関係するのではないだろうか。

さらに「社会人団体は、村からの要望にも応えやすく物資的な支援も含めハード面で感謝されやすいが、学生団体はハード面から始まり、ソフト面での要望が強い。」と沢田氏が述べていたように、ソフト面で新しい発想を村にもたらすことができる。

(5) 情報発信としての SNS の活用

現代では多様な SNS が存在するが、今回調査対象となった団体の情報発信の方法を CHISE も含めて表 2 にまとめた。

筆者らはインタビュー前、あらゆる SNS を使い情報を発信することが学生団体の特徴ともいえると推察していた。実際に、学生団体は共通してあらゆる SNS を使っていた。社会人団体は団体によって SNS の活用は異なっている。今回の調査で、社会人団体である ISSC が多様な SNS を使い情報発信を行っていることが分かった。また、社会人団体はホームページに加え、会員に送られる会報を発行しているため、不特定多数に向けた情報発信と特定者向けの情報発信を行っている。一方、学生団体は不特定多数のみを対象とした情報発信を行っている。不特定多数に情報発信しながら支援金を募り、学校建設を達成するということは斬新であり、その発信内容の工夫次第で大きく左右される可能性も考えられる。そ

こに学生らしい発想を組み込み、発信内容も工夫することで、活動に対して協賛を得ていくことは、難しいがやりがい生まれえていく。

6. 考察

考察では、筆者の学生団体での活動における考察とインタビュー調査の結果から明らかになった「学生団体だからこそできること」について、整理して記す。

(1) 学生団体だからこそ可能なこと

各団体へのインタビュー結果により、学生団体のメリットとして、学生は子どもとの距離が近く、子どもたちと打ち解けやすいので信頼関係を築きやすいということ、学生は時間に余裕があるため、有効な時間利用ができ継続的な支援ができることが挙げられた。また、学生団体は何度も現地に足を運ぶことができるため、支援先のニーズをくみ取りやすく、そのニーズを活動に反映していくことが可能であること、学生ならではの新しい発想がソフト面での支援における可能性を拡げていけることもメリットとして挙げられた。

学生団体は「学生」という社会的位置づけから、他の同様な活動を行う社会人団体ではできない活動を期待されている。今回調査対象とした NPO 法人の社会人団体以外にも、学生団体と同様に学校建設活動を行う社会人団体は存在するが、実際に行う支

表 2. 各団体の情報発信の方法

分類	団体名	ホームページ	Facebook	Twitter	アメーバブログ	youtube	その他
学生団体	CHISE	○	○	○	○	○	×
	夢追人	○	○	○	○	○	×
	InfiniteConnection	○	○	○	○	○	×
	SIVIO	○	○	○	○	○	×
社会人団体	DEFC	○	×	×	×	×	DEFC便り(会報)
	ISSC	○	○	○	○	○	年2回の会報

援の方法は、各団体によって重きの置き方が異なっていることがわかる。

図2のように、社会人団体はハード面での支援が中心で、基本的に校舎が完成するまでの一定期間支援を行うことに重きを置いている。一方学生団体は、ハード面での支援から始まり、ハード面が完成した後も継続的にソフト面での支援を行っている。これは、それぞれの団体の特徴が影響しているからであると考えられる。それぞれの団体の特徴を生かしてできる支援の形が「学生団体だからこそできること、社会人団体だからこそできること」につながっている。

このように、インタビュー調査を通して、実際に活動している主観的な感覚では気づくことができない学生団体の特徴を考察することができた。

(2) 学生団体の支援から生まれる共働活動

学生団体が学校建設活動などに関わることは、ソフト面での継続支援の充実につながる。教育支援は支援するばかりではなく、支援先の自立を考えていかなければならない。そのためには、継続支援はハード面ばかりではなく、ソフト面でも支援していくことを目指すことが重要である。学校環境の向上、授業内容や方法などの創意工夫、子どもたちの勉強意欲の向上など、学校が教育現場として機能していくには向上心が欠かせない。そして、学生の新しい発想とその実行できる力が支援先の村人の刺激に

もなり、村の自立につながっていく。「支援」という形ではなく、教育環境改善にむけた「共働の活動」が、村と学生団体の両方の立場にとって重要である。村人が積極的に行動し、教育環境の改善に取り組む意欲的な姿勢は、学生団体にとっても刺激になる。村と学生団体の「ラオスの子どもたちに学校でたくさんのことを学んでほしい」という共通の思いがあり続ける限り、共働の活動はいくつもの可能性を生みだしていくのではないだろうか。

(3) 学生団体としての課題—社会人団体との共働

上記で述べたように、学生団体だからこそできることが明らかになったが、課題も浮き彫りになった。それは、学生団体の活動は一般の人からの信頼を得にくいことである。募金時に、「このお金は本当にラオスに届くの？」と質問を受けた経験は少ない。学生団体の活動は一般の人からの協力が必要不可欠であるが、そのためには信頼を得ることが必要になる。学生団体は一般の人からの信頼を得にくい、NPO法人のような社会人団体がサポートしてくれていることを伝えれば信頼してもらいやすくなる。また連携することで、支援金の確実な送金ができ、必要な情報も得やすい。」という回答が得られた。つまり、教育局と学生団体とのやりとりにはNPO法人のような社会人団体の仲介役が必要になる。NPO法



図2. 社会人団体と学生団体の活動内容の比較

人のような社会人団体のサポートを受けているということは、一般の人から信頼を得ることにつながる。学生団体にとってNPO法人のような社会人団体は、課題を克服しつつ活動を円滑に行うためにも必要不可欠な存在である。学生団体だからこそできること、学生団体にはできないこと、それらを見極め、必要に応じて他の組織と連携することも学生団体を運営していくうえで重要であるといえる。

7. おわりに

おわりに、NPO法人のような社会人団体が学生団体と連携することでどのような影響を受けるのかについても言及したい。この連携により、学校を建てることで、不完全校をなくしたり、学校がなかった村に学校できるなど、確実にラオスの初等教育の純就学率を100%にするための動きに繋がっていることは言うまでもない。

DEFC、ISSCに、学生団体と連携するメリット・デメリットを尋ねると、メリットとしては、人材育成につながる、若者世代への活動内容の普及効果大きい、大人世代に刺激を与えることができる、子ども世代にボランティアをより身近に感じてもらえる、が挙げられた。一方、デメリットとしては、収益につながらないこと、活動が形になるか不明であるため、今後の支援の見通しを立てることが難しいこと、が挙げられた。DEFCの場合は、学生が集めた募金は極力学校建設費に回し、学生団体支援にかかる経費（通信事務経費、現地視察費用）はDEFCが支出しているため、経済的な負担が生じる。

NPO法人などの社会人団体は以上のような経験や問題を抱えながらも、学生団体のサポートを行っている。それは、デメリットで挙げられた以上にメリットが多く、人材育成や周囲の人々を巻き込むような将来

性を見越したメリットに期待しているからである。学生団体の力量を見極めながらサポートすることは、社会人団体の重要な役割ともいえる。以上のことから、学生団体は社会人団体のサポートがあってこそ一般の人からの信頼を得て活動を形にすることができ、一方で、社会人団体は学生団体にかける思いが強く、学生団体の活動に期待していることがわかる。

ラオスの小さな村の子どもたちが、学校に通い、自分自身の力で将来の道を切り開いていける力を身につけてほしいと思う気持ちは、村人や学校の先生、そして日本で活動する立場の者に共通している。学校という教育環境を整えるために、さまざまな立場の者が共に活動し、将来性を考え継続的に関わっていくことがこれからも求められているのではないだろうか。そのことを念頭に置きながら、今後も村人と力を合わせた活動を展開していきたいと思う。

引用・参考文献

- 大隅紀和 (2011) 「途上国の校舎建設への新しい協力活動—その現地報告—国内学生ボランティア団体のラオス共和国校舎譲渡式への動向参加をもとに」『国際教育協力論集』第14巻 第1号、57-67頁。
- 沢田誠二 (2013) 『アヘンさようなら、学校こんにちは 世界で最も多量にクラスター爆弾が残る国・ラオス』晃洋書房、33頁。
- Lao EduInfo (2014).
[<http://devinfohive.info/dashboard/laeduinfo/index.php>] (accessed on May 1. 2015)